

「日本音楽学会国際研究発表奨励金」受領者報告書

西日本支部 加藤 幸一

今回奨励金をいただいた発表は、オーストラリアとニュージーランドの両学会による合同学会での発表であった。

南半球に隣接する両国の学会はそれぞれに年次学会（全国大会に相当）を毎年 11 月か 12 月に開催するが、3 年毎に合同学会を開き両学会の交流の促進を図っている。私は 3 年前の回目の合同学会（2010 年 12 月に New Zealand, Otago 大学で開催）に初めて参加し、今回で二回目の参加（発表）となった。今回はオーストラリア、ブリスベン（会場は Griffith University）での開催となった（2013 年 11 月 18 日～21 日）。日本の全国大会や隔年で開催される IMS Eastern Regional Association 同様に、毎回学会テーマが与えられており、前回は「Re-Visions」で今回は「Music and Metamorphosis」であった。しかし、これもどの学会でも共通して言えることだと思われるが、個人発表及びシンポジウムはこのテーマに縛られることなくむしろ幅広いテーマで大会プログラムが組まれてあった。地域を反映してかオーストラリア（およびニュージーランド）での音楽活動、作曲家、そして現地の教育事情に関する発表が目立った。特に、学会開催初日の 4 名のパネリストによるシンポジウム及び翌日の基調講演は教育について話し合われ、大会の中核を事実上占めていたかに思われた。今回の音楽教育に関する話題では、大学機関の中での音楽教育のあり方や、大学¹によっては学士課程の閉鎖を余儀なくされたりなど危機的状況が述べられたり²、また博士号修得者が卒業後にポストがない現状を訴える者もいたり、実践的教育（演奏）に偏る為にアカデミックな面がおろそかにされていると問題提起したり、といった様々な問題点が聴衆を交えて活発に、熱心に議論されていた。これはある程度どの国でも共通する、音楽（教育）に携わる切実な問題を映し出しているかに思われ興味を引いたことであった。基調講演のスピーカーは“*We are marginalized.*”という表現を使って危機感を募らせ、講演の締めくくりにおいて、如何に社会に我々の研究が関わっているのか、我々が研究していることは何かという事をはっきりと社会にアピールする必要がある、そして（学生に）もっと音楽学の知識を身に着けさせるべきだ、という事を切実に訴えられた。

さて、最初に決定された日程では私の発表は大会二日目の午前中の枠に組まれていたが、10 月下旬の比較的日時が迫りつつある中で大会初日への移動となった。さらに、当初は 3 人の発表者の枠であったが直前において二人だけのセッションとなり、プログラ

¹ 現地学会の秘書の話によると現在 12 大学の機関で音楽科が開設されているそうである。

² イギリスにおいても Reading 大学や Exeter 大学において音楽学部が予算の事情によって（Exeter では薬学部と共に）閉鎖されることがあり（2004-05）、生徒による（閉鎖中止を求め）デモなど社会的ニュースとして話題となった。

ムの変更が二転三転した。日本出発時には今季の厳冬らしく既に日中の気温も低くなりつつある頃で、急な温暖差によって風邪も流行し、事実、移動中の飛行機でもカゼによるものとみられる咳が飛び交っていた。さらに、現地は南半球という事で季節は初夏であったが、既に 12～1 月の猛暑を予感させるほど気温が上昇していた。開催地のブリスベンでは日中の気温は連日 30 度前後に達しており、その上突然の雷雨に遭遇するなど、日本との気温差もさることながら現地での熱中症対策など体調管理に注意を要した。

ところで、いざ発表の時になって、発表会場には司会者が到着していなかった。既に定刻が過ぎており（もっとも人々はあまり時間など気にせず互いのコミュニケーションを取るなどゆったりとした雰囲気会場全体を覆っていたが）、私をそこまで案内していただいた学会の秘書が急遽臨時司会者を務めることとなった。それ故に、発表者自らが各自の自己紹介をすることとなった。

発表は初日の 11 月 18 日に 19 世紀音楽のセッションにて行われた。発表タイトルは、『Another look at Schubertian Tonality』で、主旨は、シューベルトの作品 90『即興曲集 Impromptus』の分析論を主にし、これまでの学会発表を基にしなが、今回、同作曲家による歌曲集『冬の旅 Die Winterreise』を取り上げることで、アドルノ（1928）が論じたシューベルトの‘さすらいの循環性’が如何に楽曲を構築しているかの考察を試みた。発表では、まず、Susan Youens の研究をもとに『冬の旅』と『即興曲集』作品 90 との動機的な結びつきによる関連性を指摘した。作品 90 が、『冬の旅』に類似して、《複合楽曲集 multi-piece》（Jonathan Dunsby）に相当するまとまりを成す楽曲集であることを示し、その上で、歌曲集と器楽曲集の比較検証をしながら、楽曲構造の議論を試みた。論点としては、調性構造の観点から楽曲構造を考察するのに常にトニックに触れる必要があるのか否か、もしトニックという明確な中心性（あるいはまとまりを示す‘リフェレンス’）がなければ（理論的な観点から）それは一体どのような構造となるのか、有機的統一性とは何か、あるいは必要なのか、そしてそこに映し出される分析学の姿勢とは何か、といった調性分析に対する批判考察を主眼とした。

発表後、質疑応答のセッションにおいて、聴衆の一人から、より線的な観点からの議論、特に Dmitri Tymoczko の理論はどうかと提案された。Tymoczko とは、David Lewin が開拓し Richard Cohn 等が発展させた neo-Riemannian 理論を継承する、アメリカのパイオニア的音楽理論学者及び作曲家である。彼は neo-Riemannian 理論を基にさらにアブストラクトな、そしてより普遍性を目指すいわば究極の調性概念の考察法を追求する理論を開拓している。翌日、懇親会の席でその発言した方（Andrew Robbie 氏）と直接会話を交わしたところ、彼は Harvard 大学の博士課程に 5 年間所属しその間に『Analyzing Schubert』(Oxford: OUP, 2011)の著者である Suzannah Clark のアシスタントを務めたこともあるとのことであった。それ故に、上述の Tymoczko と Clark（後者はシェンカー理論の研究者でも有名であるが³⁾）の相違についても議論が及び（彼の話は Clark の直の事に触

³⁾ 例えば、上述の著作の他に、S. Clark ‘The Politics of Urlinie in Schenker’s *Der Tonwille*

れる様で非常に興味深いものがあった)、最近の北米の理論学会の情報や動向を知る貴重な機会を得たのであった。

質疑応答の続きでは、前述の Andrew の発言を受けて、聴衆の一人であった David Larkin 氏（彼とは 2009 年に共同開催されたイギリス音楽学会 (RMA) とアイルランド音楽学会 (SMI) の年次学会以来たびたび顔を合わせてきたが) から Steven Rings の理論 (シェンカー理論とリーマン理論の融合を図る理論研究) が思い浮かぶ、と提案された。そして、それをきっかけにして、Andrew と David の両者が自由に議論を交換し合った。Steven Rings の著作には多少の知識があったものの、Lewin や R. Cohn、それぞれの理論家の幾つかの論文を除いてはこれら理論に対して正直私はあまり深く関与してこなかった。それ故に私の答弁はかなり限られたものであったが、後で顧みると、確かにこれらの理論はポスト・シェンカー理論としての位置付けが確立されつつあるのかもしれない。様々な問題提起を誘うようである。彼らの意見を今後の研究の参考にさせていただくと共に、より歴史的なコンテキストにおいた考察にも踏み込んでゆきたいと抱負している。